大川仁政録第三輯

四

へ13
3348
14

へ11
3348
14

近世美談 大川仁政録第三輯巻之四

松亭主人編次

大正十年八月発行
本大學出版部
贈

第七回

兄惡徒夫妻怨擒密夫
逆毒手一婦女自投水

再説伊豆屋與三郎於富の兩人の心根一度狂ひそめし煩悩の情慾切手切まで重て爰ホ密會なして大きる災を招くホ及び扨ハ海松抗の松い昨日源左エ門ホ親子ゑの義も切き門口より突出され紀然として居るばかりと思へやう合点の行ぬ於富が行狀我さを讀て笑を含み居られし樣子ホとい心ホ紀ホしもあらば譬へ親子ゑの縁ハ切れども婦人さへ手ホ入れい此地ホ居ば共ばづくの浦ホも日ハ照ハしと已う聽ホを

つぶやきく我家をはなれて帰りしを何ぞ源左門此文を見ざりしを
仕合ありしと云さ又懐より以前の艶書を出し見るに何と云ふこと
送りし艶書と云ふ妻ある様子故能々見るに於富の君へ与三郎よ
りと扱い外の男より来りし文なるを何かもよく聞き見んと始めて讀
下し見るにさらく心変りしに非ず柔きるい直々物語るべし能首
尾あらば沙汰あるべき由を書き此状の文体なれども兼てひ隠し居る文
なり此与三郎とは慢に鯉屋方に逗留なり鎌倉の客なりい
一の間ふる斯る事を仕出しなんとしく世上い我悪叫ぶ意趣晴し
に此文を證據に源左工門に対する事なれども扨きて今に思ひ
知らして呉んと文をかくと巻納め立出んと考へしが此一今宵い

何ぞ居るやらん内へ往て吐しもならば行事もなりがたしいざま
べきこと猶豫内同ど子らの者来りなあば今宵い親分へいざく居ら
ると問へば今夜い内に居らるべし明日い上州へ行くなり我まも一緒に
行積りなり十日余りい留守なれば用事あらば今宵内へ行べしとい
ふ扨あて吐しのならぬ事なり明日途中に待うけ吐すべと扨
翌日此地の出端の茶店に暫く居て源左工門
門出来りなば海松杭去出親分貴公い情ある人でいるとこいなば
源左工門見て爰に人畜なば昨日あもありもせば我とともに情ある
者と云身の程もなき大虚気二言とのべ目に物見せんと猶と目眼べ
海松杭騒ぐに貴公の面ば捨つるに子分の者も面ば立まのべに源

左エ門知らぬ事を何とぞ申サア夫故海松杭ゞあるとは面の捨らぬ様心を砕くと知らーやらぬる何と云我面の捨るとは其子細ハサア左様あるべい言ぬ先此方へと茶店へ伴ひ座敷を借り子分の者も遠ざけて貴公の面の捨るとは子細ハ如此々と耳へ口寄せさてやはり源左エ門ハ色を変ずも其様なる事ハ有はじと思へども夫ハ慥なる證據あるとは證據あるとは證據あるとは慥なる證據あるとも有やとは證據あるとは是なるとは与三郎ゞ変と出ー此事と貴公の耳へ入ず品よく言ふん爲悪ふ仕ると異見ヒたと思へと此身と片手おゝ親分子分の義と絶と足踏すると情はヒ是非ゝ及ず夫なるゝ濡衣と着て仕ようと覚期ハ有れと夫ハ此身の悪名のなるゝず貴公ゝ對して

不実ゝなる故明白ゝすあるとは源左エ門我知決りして心付ず汝と根ヒハ一生の誤り有り量簡すべし此上ハ彼等両人のゝ呼ヒ呼ヒと色と変ゞ屹相すきゞ海松杭見て親分貴方ゞ云心なら是ゝ直ゝ引ヒて文と證據ゝ内義と〆揚与三郎と呼ヒて二人並ゞて存分ゝとゝ押ゝてのもゝ夫ゝ曲ゞゝ此文体で今宵ハ慥ゝ相違ゝ忍ゞ来るゝ相違ゝ子分の者と呼集會て彼ゝ二人を搦ゝ手術ハ我方すあるとは夫より表ゝ知ゝ両二人ゝ今日房州へ行づき処少ー行ゝ訳出来ゝゞ汝ゝハ始め子分の者共を密山ゝ是迄来る様呼集めよとの〆ゞ皆兼知ゝて出行ゝゞ頓て赤間ゞ子分の者共此所へ寄會るゞ

汝等とらび寄しい外の事ゐそも侍し如此々々の訳なるべ取ゐ
ゞさ様裏表ゐ汝ホを伏置て擒とゐ寸積りなゆと暮るを待てゐを計
らん先そゐ迫い寛々是ゆ一杯呑べーと丈より其所ゐて酒宴を
催し日の暮るを待居さり扨日も暮ゐ及び夫ゐ心利さる者両三人
呼出し其方達い密ゐ我家の裏表ゐ目立ぬ様ゐ忍び居て人の
出入ゐ心を付如此々々の者の來らゞ注進とよとゆい付ゆり丈より
近辺の酒樓へ行て彼ゐゞ注進を待居さり頓て其者共帰り來り
我々裏表ゐ密ゐ伺ひ居しゐ其与三郎と申らゞ忍來り内へ這入ら
ゞ裏表共門口とノ鎖をして仕舞ひさり早く行五へとりゝバイく
ひゐゐ車を仕損ゐる寂早袋の鼠なり傍りの寂静りさる時分

あそはしと大さり又々酒宴を催し一夜半の頃ゐもさり々あゞ時刻
いはしさらゞ是さり押寄へし誰々い裏の方へ回るべし誰彼い裏と
俱ゐ表の方へ來るべしと下知ゐ皆々夏を立出さり扨与三郎
於富い酒もよき程ゐ治め閨へ入少時私語其折柄近所も
そく静りて遠寺の鐘のあるゝと響く此表の門口ゐ叩き源左
工門ゞ戻りさり爰明ゐくと云声ゐ兩人い驚りして与三郎い立上り
如何いせんと周章ると早く裏より逃玉へと於富ゞ教へゐ与三郎
帯引メて裏口より走り出る其所を兼て外面ゐ待設し赤間ゞ
子分の悪者共物をものゐゞ与三郎ゞ向脚薙て打倒さり
以てゐるべき其侭其所へ倒るを立ゐ抗重りて取て押へ

海松茶

於富与三郎
この不義顕
るゝ海玄杭
ゆ追ひ海中
ゆ身を投ずる図

於富

くるぐく巻おそ〻上さう与三郎い夢うつゝおゝ成行事ならあと
思へ共我身ゝ過ちあるかゝゞ一言とも出さぬて觀念して居ら
を傍りれ木立ゝ縋り付表の方へ注進ちさう内ゝ於富ゞ与三郎
弐落延さゝんと思ゝゞ故態と寐惚〻声音〻て今明外ゝ声
かけて燈火吹消〻火お取出〻音のゝさて間取おそ其間ゝ表い
裏口〻与三郎を捕へ〻とゝふ注進を聞ゝも源左エ門下知をら
夫打ちゝ色と云ゝ早く表の門口踏ゝり衆人一度ゝ込入ゝゞ裏
口ゝも込入ゝ此物音ゝ於富い驚き扱い重・露顕して帰り来
ゝ〻物ちゝん此侭爰ゝ居ちゝたゝゞ却而重〻の六ケ敷裏口ゝ
迎出んと思ひ〻ゞ我裏口ゝ迎出たゝ与三郎ゝ妨げもちゝん

少〻も遠く落延さゝんと壁ゝおづつゝ引添て諸人を遣り過〻
表の方ゝ迎出さう源左エ門い高く誰も居めゝ燈〻を付ゝ
立まゝど下女も其間ゝ迎ゝ〻ゞ行ん音ゞゝく答ゝる者もお
らざゝゞ風と喰ふて迎ゝ〻ゝ夫追ゝひゝと云ゝ早く裏口ゝて追
行い海松抗一人何思ひん衆人と引違へ表の方へ追行さう内ゝ
赤間源左エ門残り者ゝ下知して与三郎を引出てとゝふ
早く子分の者共情用捨もあらけ形く庭先へ引出ゞ与三郎を
荒縄ゝを縛ら屋ゝ伏引ゝ多ゝ月を見聞さて傍を見ゝ恐鬼のかき
荒男共十人斗前後左右ゝ取巻居ゝ程もあらゝゞ大燭臺三三
挺縁先ゝ引〻立さ色至人と見えて年の頃三十七八歳ゝりやうなり

めりんとなげき大の男長脇差を引提て採端ゝ顕さ出さ子三郎
を擒と称付ヤー二七めト總房州ニゝ及ら子東國ゝ隠さ形く
人も多そゝ木更津の赤間源左エ門を知らざるゝ其女房と有
なぐら生若輩ゝ分際で密通ゝ大盗人二人並づて四郎と
なすゝ凡人のする密夫の成敗人も知つゝ此赤間が面へ流と流れ
とからい其迯礼ゝ去を呉ん木更津沖の太刀魚を先小ー完賞
散去ろ夫皆の者急所と除て一す二す深手を負ゝ苦痛を
さとま夫を音ゝ一獣汲んとさも憎さげゝ打見ゆ哀び情をあらば
惡者ども面体手足の嫌ひなく深くも切らゝ一二寸我も〳〵とさい
なめ源左エ門ハ是を見て子分の者ゝ敵取らセ心世よげゝ酒不

居ゝ子三郎ハ始めゝ中々ゝ苦びゝ我ゝ成る禍ひゝて
道ゝ道を覚期極めて物をもいゝ苦痛を忍びて居ゝ
今ハ五躰ゝ明所もなく鬢先頬先腮迫數ヶ所の手疵ゝ息も絶
〳〵ゝ伏び源左エ門夫氣付を与へ介抱あセと指揮ゝ子分の
者共ゝ水を吹ゝ氣付を呑セ介抱なセど又あやゝ子ゝ与三郎息
吹ゝ一目と聞くを源左エ門打見ゝ赤間ゝ返報何と謄ゝあと
へたゝ今暫く辛抱致セ今ゝ女を連来らば此体を見セ上二人並
ゝ引導ハ此赤間ゝ手を下ー此世の暇とセて呉る有難く思ひ
待て居き我ハ須休足ん汝等ゝ家前よりの骨折労きつらん
是へ参り一休とセ一盃呑と言捨て赤間ハ二間へ入ゝ頭の下

知ふ子分ホも縁先ふ居並て酒うち喰て居うる扨又於富ハ家
前態と与三郎と道を変表の方へ逃出しゞ跡より追手の來らんと
逸足出して走きども手ぶかうき女氣の與三郎ゞ事業ゞられ
ぬ出す足も忙どろあそと何國をあそと定めもど磯辺傳ひふ走り来
海松杭跡より追へ來て丈と見るうり大音ふ女め待と呼ゝ
扨い追手の近づきしう道ゝけい道きんと跡をも見ずしてあげ
行い海松杭又も声うけて与三郎めい生捕て頭の差笠でかぶり
切今ごろハ寂滅しゆうん已一人逃うとこ何國迄逃さんゝ男と
俱ふ往生せうとゆふ声聞て思ふ様スリヤ捕へられ正ひしう尤す
きゞ迚も助けゆゝ我も是う引ゝ死ゞ一所と思ゞゞ彼ふ

ゞ手込ふ遇んうり此淵ふ身を沈め死行場所いうゝも今宵ハ過
さぬ二人ゞ命斯ゝう行も前世より約束事あそ有らめと心一つふ
覚則を極ゆ磯辺ふ近づく其時しも海松杭ハ追分て帯ぎい
取て引戻すを女の力も一生懸命其手を拂ひてうけ出すと又
海松杭ゞ後より袷際取て引戻ゞ女ハそれと手ゞしてくひしゝぐ
の帯を引ぞき其身いゆけて下着の仔寄來波へ飛ちゝゞ引止
うる上着ハ其まゝ手ふ残りうる海松杭ハ忙然ゞて行りゝ
躰ハ寄て引汐ふ漂ひ浮り沉うる沖の方へぞ流ゞ行ゝ

第八回

惡漢弄二人命貪得黄金
與三郎恥身捨親亡命

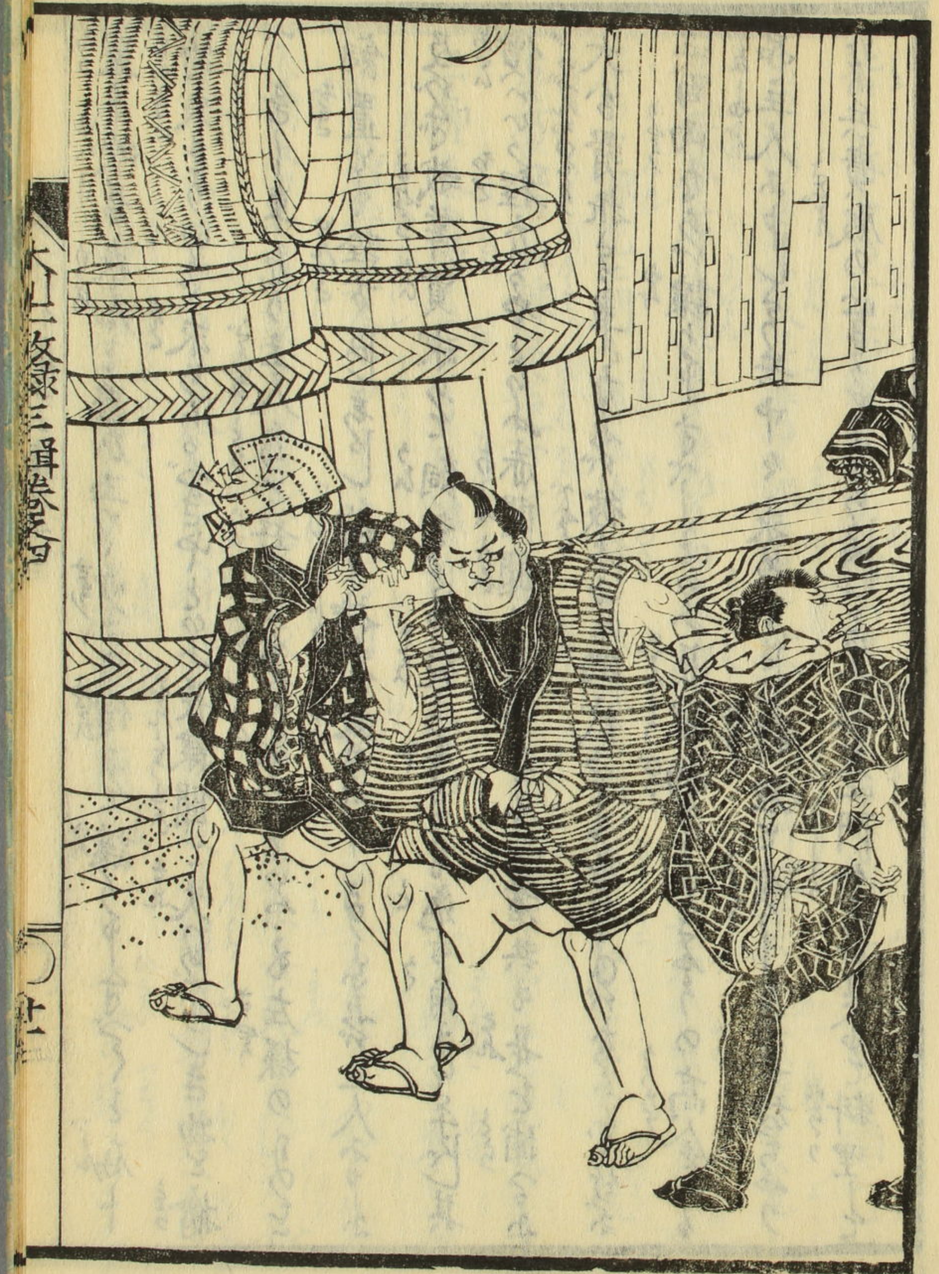
死生命あり富貴天あり生死の際ハ人力の及ばざる知るべしさ
二年三年疾て今ハも死ぬべう見ゆる病人のいつ迄も死なざるあり
又昨日今日までも健ぢて居しも俄ハ頓死するもあり或ハ其身ハ
罰無うして天変地妖ぢて横死するものあり量り知るべき物ハ非ず
扨も海松杭の雲ハ己が悪の叶ひぬ意恨より於富与三郎が不義
を源左門ハ告既ハ与三郎い擒とおし逃出る於富を追行取押
へ〜上ぢて我心ハ従ひなば源左エ門ハ云て一命を助ん若さらずば
憂目を見せんと思ひ追行漸のまを捕へられ於富上着ぬい
て躰をぬけ波ハ入り〜らんさらら手の中の玉を取られ心地して暫
於富があれゆくを忙然として見ゆるしが今ハ影も見えざれば

詮方なくすごすごと立帰り源左エ門ハ言やう皆々裏手へ追ひし
が彼ハ与三郎が捕へられしと知らざれば与三郎を逃さん為道を変て
逃なんと思ひし故我而已表へ追行漸追付既ハ捕へられしが彼上
着をぬいで波へ飛入られ故上着ハ我手ハのこり肝心の女ハ海へ流
れ出られしと源左エ門是を聞て捕へずして残念なりしかども
ぢて迷ハ命ハ助られしと子分の者共口々ハ義が然ある
らんこの此野郎息の根留てもよかりしと源左エ門イヤ〜女をとられ
男計救しこの密夫の成敗相ならず言訳なし女が死骸を尋ねて
共海へ出て知らく車ぢて水し海妻杭聞て然らば与三郎ぬい此
侭放ちて置し迚此手疵ぢて中々動くるもうるほしのハ為

らゐゝぞ源左エ門聞て丈夫を我手術有り与三郎めを玉ゐ
一仕業する積りなり其仕方ハ如此々々とのひゆゼ子分の者どもゐ
長持を出さゼ与三郎めを此中へ入よと長持へこを入さりゝ与三
郎ハ數ゝ所の手疵より出る血汐ハ泉の如く五躰ゐ流まで条とな
さめぐら糠枕を手明〳〵如く息も絶々ゐて半ハ知りて半ハ知ら
ぜすゐ伏ゐでなり居ゝ如斯して夜の明るゝぞ待居さりゆゑて
夜も明ゝゐゝゐゝゐば長持を擡荷ゐゼ鯉屋ゞ方へぞ押ゐけり
鯉屋善右エ門ハ此近辺の豪家ゐて造り酒屋とは居ゝゼ此日
表を明男共掃除〳〵を居ゝ所へ赤間源左エ門長持を擡荷ゐゼ
子分大勢引つゞき出來り善右エ門ハ起出られしゐ面談致し度ゐ

有て参りさりとゐふ男共何事ゐやと思ひしゞ此由を申々ハば
此家の長隷是をきて源左エ門主人ゐ逢べき用ゼし是ハ定所し無
心ゐてゐ中す心ゐゼと思ひしゐへ自分ゐ立出て赤間ゐ逢てゆ
ゞり善右エ門少々不快ゐて手甘をゐば何御用なるゐ拙者へ御用
の筋仰聞られゼしとゐふ源左エ門此家の主人病気とあゐば詮ゐと
ふゝ然らば其許ゐ申すべ〳〵我ら夜前珎しき物を得さり頭ハ
猿ゐ似て胴ハ鳥なり尾ハ犬のゞし我方ゐ飼置〳〵雌鳥を來りて
取喰ふ故ふ是を生捕さり子分の者共是を料理〳〵を喰んとゐふ
我も為ゞ是と思ひしゞ丈夫も命り殺生なり放ちゆんと思ゐども拙用
手ゐ入りし物をむざゝ放ち者ふんも残念なり此家の主人ハ鳥余多飼

源左エ門鯉屋
方小与三郎と
賣こ三百両の
黄金を得る畳
源左エ門



置るく故若衆と思ひ玉つゞ少々の價にて譲りゆすぐくと存じ
持来まりいそぐ求めらるべきやとのふ長隷聞て夫いめづらしき物を擒
へ色〻車なり主人鳥を好んで多く飼あくとのふ左様のものを
飼置ても詮方ほしもし態々持参致されゝ可あれば主人おゆゝふ
及びぎ我等買求めて飼おくも放ちもるゝも兎も角もいそ子ども其
價いくら程なるやとのふ赤間聞てきれば子ふの者共も是を捕てふ
大分骨折る事なれば彼ふも酒代ともきさまべなんぞ故ふ
三百両ならば譲りゆすべくとのふ長隷悔りゝてさあらうの高金なる
品主人ふゆしなら兵中々求め申さじ料理て食ゝるも兵放ちゆり
なり兵貴殿の心まりせふとらるべしとのふ源左衛門然らば是を料理して

皆の者ふも一盃呑すべゝ價ハにしゆするり面倒なぐり酒一杯
玉つゞしとのふ数是非なく酒と出しゆへるば我料理すべし是へ持まれと
いふ子分等合点ざとのひさるる長持の中なり与三郎を出ゝ蓋の上へ
居らせ源左衛門前へ持行れば源左衛門長脇ぜとすらりと抜て
立ちなり長隷是迄心付ざしも此体と見て悔りしあること見まべ与
三郎朱ふ染て居なり長隷仰天して仰向ふ倒にぜら両手を拳てまぐ
〻待玉へ主人ふ申ゝて兎も角も致すべし必ずとまりるふあくのふ
赤間スリヤ此家のあるじふ言て求めらるんとる然らば先まづ義不
兼知とある事なら只今是ゆて料理とんとのふ故長隷周章て奥へ走り
入んとする時障子の彼方なり主善左衛門声かけて委細の様子へ聞れ

を聞き善右衛門夫へ往て面談すべしと云て出来り赤間に向ひ
いかにも我求むべし太るから其代物に疵あるべき様子ところくと吟味上
品にかの此方にもやはりあり子細あて疵物あれば是を
べ源左衛門家前に申す通我方に飼置雌鳥を取り喰ひて我に類
泥を塗逃出さんとする処を捕へ若求らきたなべ此方に屹度一分の抵紙
ありて小海松杭其抵紙を讀ませ海松杭心得と彼与三郎が於富へ
送りし文を出し大音に是を續上斯の造る抵紙あり是でも贋と云
う三百両なら安い代呂物何と買ずば成まじきと云ふ證據あるから此善
右衛門が求りんぐさ手に抵紙なれば三百両にもなれば此赤間が言出しと
事負るこの大嫌ひ三百両に求らきたなべ抵紙を入て賣て進ぜう然

らば善右衛門が求むべし三百両の金子源右衛門厳に渡すべしと指揮
に手代が持出て源右衛門が前に差出べき抵紙添て此家の主人を
詞に海松杭已前の文を善右衛門に渡す源左衛門生
人に向ひ斯引渡す上は若代物に異変有ても此後言ふまじと念推
言葉に善右衛門短屋の家の外聞を恥べ此座の車に是切に丈を此方も
望む処子分の者に口留して決て他言致すまじと詞ぶいて源右衛門
三百両を懐中して子分の者共引つれゆくとて出行ける跡家内に
周章騒ぎ医者と狼唱ると善右衛門押ぎに先醫師を招き与三
郎に療養を加へべしと外療の何某を招き与三郎が疵を縫ひ林
して善右衛門申す様此一条い与三郎が過ちより出来し車なれば

いろゝも詮すべき事ー衣なくら伊豆屋喜兵工方ゝり居ゝ与三郎及
きぶ此後ゝ捨置ゞし先鎌倉へ此趣を申ゞ生ゞと人を以て此由申ー
ゞ喜兵工夫婦も大ゝ驚き全く与三郎が不埒より引出て
事ゝ有ゝ鯉屋へ對ー言訳ゝし三百両の金子を鯉屋へ返済ー与三
郎を此方へ引取療治致ゝ度ゞと伊豆屋方ゝゝも鯉屋へ人を遣金く
癖が不所存より事起り心配を遣段気の毒なるゝを述て三百両の
金子を返済ー此方へ引取療養致ゝ度ゞーと道中の手當をなゝー
医師ゝも同道ゝ致ゝ道ゝゝ治療を如何鎌倉へ引取ゝ度ゞ喜
兵工申ゝ此方へ引取ゝ度ゞ當人も心を痛め却て全快も間ゞ敷ゞと
小梅ゝ申ゝ已ゞ別荘へ引取人を付置此方ゝて療治致ゝ度喜兵工

思ゝの木更津へ預けー我誤りなりゝも於くべかゝる事出来て恩ゝ
なゝら異人の觀相実ゝ違ゝ処ゝりと必ゝ思ひ義理ゝ拵の事ゝ
ゝべ等閑ゝ致ー置ゝ実家へ對ー決ゝと以前の乳母ゝ呼寄付
置其身夫婦ゝ行ゝ様子を見ゝ面体手足へ何ゝ所ゝ
なく數ゝ所の手疵を誠ゝ以前の面影ゝ有ゝ然ゝ急所を除
ゝ命ゝ少ゝ追ゝ不全快成ー四月五月經ゝ頃ゝ全く平愈ー
三郎つゝく思ゝ様我命つゝく全快ー却て面目次第ゝ
なり身體髪膚ゝ父母ゝ受ゝ敢て毀傷ゝ孝の始ゝ
ゝ不斯ゝ姿ゝ養実両家の父母ゝ對ー何ゝ言葉ゝ
有ゝ再ゝ面ゝ合ゝ事ゝ此上ゝ是非ゝ及ゝ密ゝ此家ゝ退て連

も惡名受くる身なれば獸心惡鬼も言ひつべく惡者共の中へ斗ぐり盜賊引剥を友とし共に[illegible]の詮義も仕難し御糸印を取得たる実家の父母へは言訳あり強て陰の養父母へ身を半馬にしたり共養育の大恩い報ずべしとなりくと胸ふ問ひ胸ふきこて或夜密ふ一通を認め見を養家の父母へ送り此家を立出何所ともなく立さりぬる

第九回

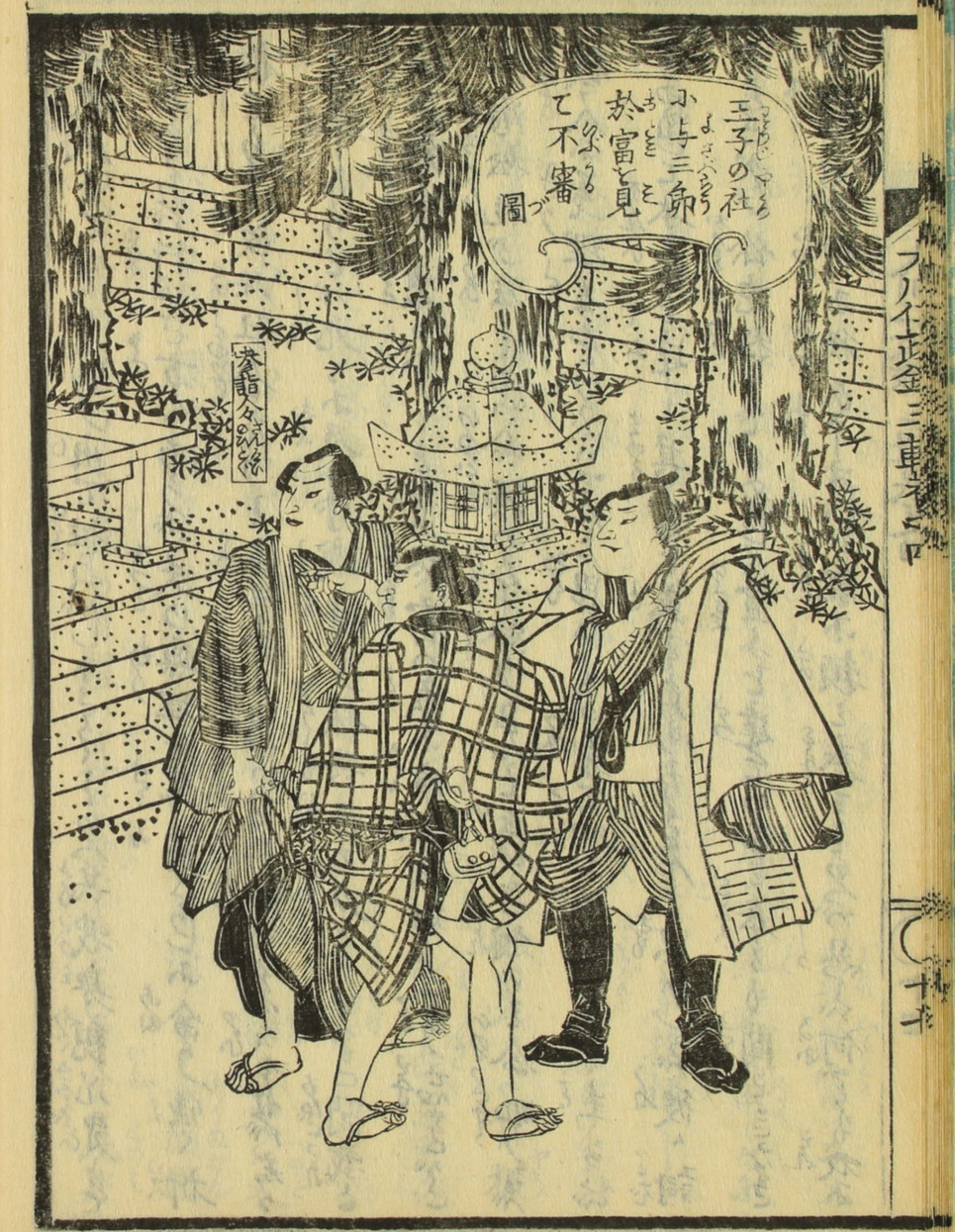
南客於船中扶瀕死女
孤獨婦被欺而再過身

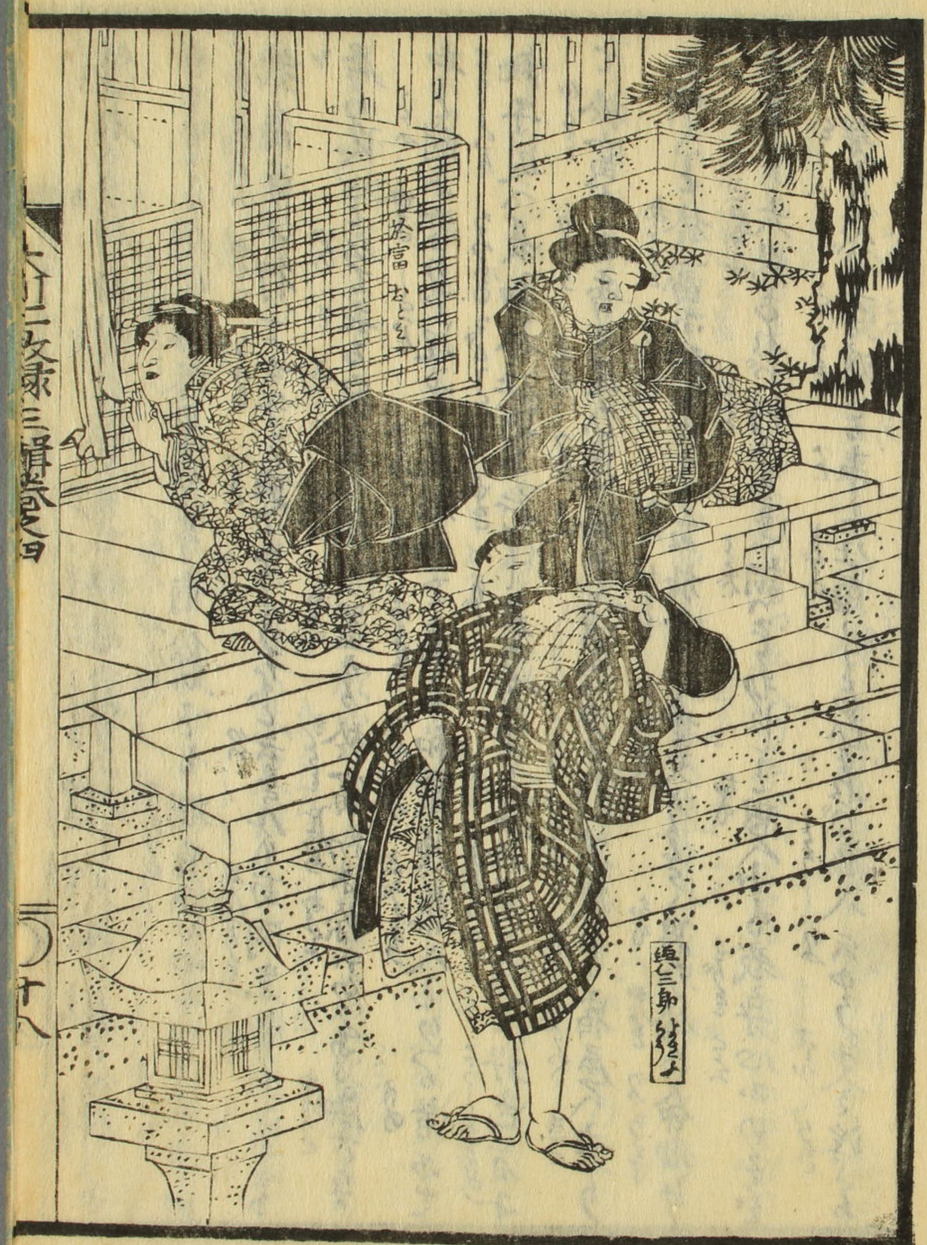
道の道と云るハ道ふあらず道ハ是自然なりと只時の宜きふ順ふこそよろしあれ共愚ふて其時宜を[illegible]而已扨も伊豆屋与三郎ハ父母ふ書置を送り逐電ふ及ぶ是ふ友を撰ぶ[illegible]道を弄び惡友と交り名を朱ふ交りて赤ふなると云ふ喧嘩を[illegible]人を痛め折り名を人呼び切られ与三郎共向ふ疵の与三共異名て少る人あい蹴と嫌ふる早其年も小て明る春ふも成名ふ与三郎今年い廿二才血気盛んのまなり是ごとの業もなく只放蕩ふのみを身を持昼夜となく所を方々と遊び歩行るぶ或時王子の稲荷へ参詣あとしふ我ら少し向ふの方ふ一心ふ拝を居る女あり於富ぶ姿ふ然ぶ[illegible]と与三郎思ふやう於富いろぶや赤間ぶ方ふて二人ぶ密通顕ふ節木更津のうちへ身を沈る沖へ流き出しと海去杭ぶ云ふ事あるとさて小ぶ此世ふ居るべき様ふし扨もよく似る者も有りのふと思ふから

我心の迷ひより歌に見ゆると心を鎖めそよく見るに実に死を二つに
刻むと其侭なり母も祇念終りて帰り行く人跡より付行てつるに
下女と思き者一人付添外に男の連と見えて二三人も同じく
もしが慮忍に詞もみぐるく夫よりつゞく行に源氏店といふところの
表に塀あり聞ひる内へ入りて夫より其近辺なる酒店へ行て獨
酌あと一盃を呑なから何と立くく尋めるに酒店なる男のやうす様子
人の去年中銚子辺へ商賣用にて行けるに其帰りさ連来りて
妾となりあきなる内に同じ居るなりなるべ於富とりに由を語りて
名ゞ其銚子に来るいろ頃のるなるやとりに去る辛の四月
の準なるとりふまるに木更津にて我病を受くと時節も春冷

名迫同じ名なれば相違なしの体して助りつゝ我斯る姿となり
も彼方へなり助りたらんにに我事をも尋めるきに左もるして外に
男を持事やあり又赤間に内にも我擒とあるしい聞つゝんにあれ
一人のるくに不実なる女ありよくく若実の於富なるべ其侭
出置ゞと気色を変て行んに若人ちがひの時い言訳
なくく明日碇と実否を正せくく上のるに不せんと其夜い其侭なり
なる愛に又於富い木更津にて海松杭に毒手をさけ寄来る
波へ飛入なるに沖へ流き出るに其折柄銚子の方より艫柏子揃
へく押切り来る早船有しに浮つ沉つ流き来るに於富に辨を見るよ
りも舟中より声高く怪我の入水に覚期の上のなるに何にせよ引上

と船子共両三人飛入て於富と抱へ引上とりなを共於富い二三町も押流さゝ〳〵車故ゑ水さへ大今吞ゑ家早車きれ中々ゑ助るべうもあらざりゑ此舟中の客と見えて舟子どもゑ指揮して水を吐せ薬を与へさゝ〳〵と介抱ゑしなば潮ゑ心付れどのまず一向正躰なれば須休生命ゑ有て潮ゑ引ふうなれば様子を尋ゑ只死て玉へきとのひて又もや海へ飛込ん気色ゑきば人々取押へ居て彼客のゆ様依ゑ迚一旦助々〳〵ものを何とて殺さるべきやゆゑ訳ゑ知らねども明白ゑ子細を語きたい又力共なるべきなりと頼母敷ゆ故ゑ於富妾い木更津なる赤間源左衛門とゆる者の妻なるゑ始めの程い妾を愛〳〵ゑ今い此身ゑ秋風立てつらく富り出て往ねばしゑさるとの兵我身親兄弟とそもあらざれば行べき方もあらぎ夫の無理を耳居ゑ命り強く折檻ゑ故此仕合なりと与三郎ゑ事いつゝ能ゑ聞ゑ我身ゆ様共依の力となるべき間我と倶ゑ鎌倉へ来るべ〳〵とゆ於富い兎ゑ角与三郎ゑ忘れ海松杭ゑ〳〵ゑ今頃い命終りなんと云ひき我のゑ命助るゑ彼人ゑ義理ゑぞゆゑいなんと思ひ〳〵ゑ兼て心ゑ望ゑもある事ゆゑ本意を達〳〵其上ゑ兎も角もなるべんと思ひしゑ彼ゑ詞ゑあるゑゑ依ゑ程までゑの如く宜ふを違て の ゑを奉るも聞きなきゑ似ゑれば仰ゑ従ひ申すべ能ゑ頼と奉るとゆゑ然ゑ何でも我ゑ


三子の社
小与三郎
於富を見
て不審
圖
於龍人女のこと


於富
與三郎

任せあるよ恐くい討らぬと云て鎌倉へ伴ひ行て我邦へ直さ伴ひ去
きともよされども内外のものく手前係のことを明白ふのものもいで又手ぶが
我商賣ふ行て女子を連ろうなど云きんも面倒先暫く宿屋ふ
居らぬべと云て去る宿屋へ預け置ろ於富初ふ係いろ物語なる
やと問ふ雪の下辺ふて呉服物を高ふ和泉屋藤八とのる者ふて
銚子辺へ長物杯仕ふ行し戻りなりとの此者至つて好色者ふ
て於富ふ色香ふ迷ひ連帰りしめなりされば其後日を宿屋へ来り
さまくと於富ふ戯れ多れ於富い今更うるさく思ひ係ふ命助け
らまし大恩あれば何ふ事も詞へたもれと思へども我身心ふのぞ
ある身なれば去る浮き事い仕難しとひたれば藤八云やう更を浮き

車ふあらず係親兄弟とも なく便ぎ方もるべし聞り我も又呉服
物と商ひ富るとの事あれども四五人の手代を召仕ひ商ひ手ぶく
なれば兵未定る妻迎もあらざれば我方へ来り内の取締りをもなして
貰ひたなば我もはし係もよし是双方の為なれば又望をあるとう
云る時ど如何なる筋ろあらねども我も又男なり我妻となるさんん
ふいろなる事ふても俱々カとなりて係の望ことを叶ふべし望ことを
いふい如何様なるものやと問ふ於富妻ぶ望ことの容易ならぬ
ざる事ふ卒介ふ人ふ語りべし実い木更津なる赤間源左衛門も
妻ぶ望ことを達一得さセんと云一故心ふ従ひ伴ひ去ふ妻を
従ぐん為の偽ふて有ん其後度々言ても一向ふ取合ず必詮

此人頼まれしと思ひ故太る頼りき人ハ内々其事を語らひ
しが密夫なりといひく其男を捕へ殺害ハ及び我も又殺さるべ
き已を逃延んとも我身の活てハ其人ハ義理立ぶと思ひ水
中へ身を沉めを伶の為ハ助けらまさり去筋故ハ伶頼母しく
宣へども妻ぶのぞを口外已上ハ徐不美知なるる若亦間ぶごく成
ぶ我身立ぐきを筋なれば此事のハハ免し玉へとハ藤八云様
徐の云る処尤なり太なぐら斯いべ少しの事と思ケ敷ハ様
ハて悪ケれども廣き海上ハて我舟の前へ徐の躰のなぐれ來り
助け上已い是前因のなす所ハ一朝一夕の義ハあらぐ其ハ徐の
望ケの通り我ハ語り玉へ若我力ハ及ぶき筋ハ速も

御身の力ハなるべ若我力ハ及ぐる義なりぶ聞とりとのハも
夫切ハ已て誓て口外已其時ハ徐の心ハまり如何様ハも計らハ
べし包まず様子を語り玉へぐ云る於富借思ハやう実此男
ぶハ通り我死しぶと助けらぶ是一朝一夕の恩義なるま
袖すり合ハも他生の縁と云なるハ斯る値偶ハ又前世のなす
所なるめ余りハつもも惡りなんカハ及ハる事なるハ他言ハ已
じと云なまぶ能々口留しと物語るべしと思ひ成ると徐の仰る通
命の親ともりぶき大恩其上又斯迄宣ハを余りハ包も罪深
故ハ妻ハ望ケの一通物ハり申さんぶ必ず口外して玉ハるる堅
く口留已て委細の様子と物語りなれば藤八ハ様成ハど

伜の望を中々我身高人の身の上を力ハ及ぶ所あり共
爰ハ一ツの手術あり我箇様々々計らひて伜の望を叶ひ
若此事偽りなりなば我立所ハ八百萬神々の御罰を蒙じ
と神ハ誓ひて誘ひなばうそハ云へども偽りもあるまじと
藤八が心ハさぐひ身を任せる故頓て我本宅へ引ともど
先當分の間是ハ居ドしとのひて源氏店ハうまひ置ーなり
於富が望この物ぐりハ爰ふりのぐき処凡一巻の紙員限
あるべ爰ハ五ドしぐく五の巻のたーしハ説く看官經
しを玉ハ事なりを

近世義談 大川仁政録第三輯巻之四 終